

東京在住のデザインディレクターが 富山に通う理由



[期日] 2015年6月12日(金)

[会場] D&DEPARTMENT TOYAMA

北陸新幹線と共にオープンした、ロングライフデザインショップ「D&DEPARTMENT TOYAMA」。同ショップのギャラリーで開催された富山のデザインの軌跡を紹介する展覧会に合わせて、D&DEPARTMENT 代表ナガオカケンメイ氏と、富山県総合デザインセンター・デザインディレクター桐山登士樹の対談が行われました。デザインセンター開設の背景、富山の持つポテンシャルやこれからの可能性について語り合いました。



ナガオカケンメイ

デザイン活動家
京都造形芸術大学教授
武蔵野美術大学客員教授



桐山 登士樹

富山県総合デザインセンター
デザインディレクター

なぜデザインディレクターになったのか？

ナガオカ 最初はデザイン誌の編集をなさっていた桐山さんが、デザインディレクターへの道を歩みだしたのはどうしてですか？

桐山 かつて『FP』(学研)というデザイン誌の編集をしていました。国内外の名だたるデザイナーが登場する雑誌でしたが1万冊も売れない。どんなに素晴らしい人を取材し一流の作品を載せても、一般の人には関心を持ってもらえないと思い知った。

ナガオカ 桐山さんは10万部売れなければ社会的な影響を与えるものにはならないと言っておられますね。

桐山 何かコトを起こすためには10万がひとつの単位になると思います。そのための方法として始めたのが、展覧会だったんです。いろいろな展覧会を企画し、ある時パオラ・アントネッリというMoMAのキュレーターと一緒に「ミュータント・マテリアルズ展」を開催しました。そこにはデザイナーだけでなく工業技術や素材に関係している人たちも来てくれて、展覧会が1~2万人の人たちを動かせる、雑誌よりも確実なメディアであることが分かりました。

富山県総合デザインセンターとの関わり

ナガオカ 富山県との関わりは？

桐山 1992年の12月からです。当時はパ

ブルがはじけた直後。「47都道府県デザインセンター構想」というものが提唱され、その中で唯一実現に向かって動き出していたのが富山県でした。ソニー企業の社長も務められた工業デザイナーの黒木靖夫さんが、富山県総合デザインセンターの前身となる富山インダストリアルデザインセンターの所長に就任され、私に声をかけて下さったのです。

ナガオカ 当時の富山県はどんな状況だったのですか？

桐山 フリーランスのデザイナーが数人しかいず、そのことに驚きました。「デザイン立県」と言いながら、県内デザイナーがほとんどいない。これを何とかするためには、東京をはじめ全国から活躍しているデザイナーをここに連れてこなくては行けないと思ったのです。

ナガオカ 先ずクリエイティブな環境を作ろう、と考えられたんですね。どうやって彼らを富山に連れてきたのですか？

桐山 工業製品やファッション、グラフィックなど、日本の70年代以降四半世紀にわたるデザインを一堂に展示する展覧会を企画し、その作者であるデザイナーも招へいして「デザイン会議」を開催しました。そして彼らを審査委員に今日まで続けている「デザインコンペ」を開いていき

ました。

ナガオカ そうして1999年、富山県総合デザインセンターが誕生するんですね。このようなデザインセンターは他にもあるのでしょうか？

桐山 世界を見渡しても珍しいと思います。このセンターの特徴は、試作ができるということ。CAD/CAM、マシニングセンターや最新の3Dプリンターなどの装置も完備している。ものづくりからブランド化、販路の開拓まで支援できるのが大きな特長。商品化事例も多く、国内外の市場で販売実績も積み重ねています。

デザインの中で、
富山の素地を磨いていきたい

ナガオカ 東京在住の桐山さんの目に、富山県はどのように映っていますか？

桐山 富山県には、先端産業から伝統産業まで、ものづくりのあらゆる技術と人材が揃っている。長期にわたってものづくりに関するノウハウとネットワークを蓄積してきた世界でも稀な土地。その意味でミラノに似ている。ミラノに來ればたいいていことができると言われるが、富山県もまさにそう。とてもいい素地があるので、デザインとの接点をつくることで、それを磨き上げていきたいと思っています。